〈翻刻〉野路のちりひち

坂本恵子
川崎協子

本書は故田中重太郎博士ご所蔵の写本である。縦二七・三糎、横一九糎の袋綴一冊。紺表紙の左肩に「野路のちりひち」と墨書した題簽（縦一七・一糎、横三・五糎）がある。墨付七丁。本文は一面一〇行、一行は一八字から二三字書。和歌は改行一字下げで結びは本文と続いている。本文と同筆で一丁に菅原雪臣の序文、七丁ウラに奥書として「文政八乙酉十二月八幡中務光保所蔵の本を以うつしぬ　元貞」とある。なお、一六箇所にわたって頭注が施されている。翻刻に際してはあとにまとめた。

修学院離宮は比叡山西麓の雲母坂登り口に近く、水脈が幾重にも流下する音羽川扇状地にあり、京都盆地を見下ろす景勝の地にある。後水尾上皇の造営で江戸初期の代表的山荘である。山荘がほぼ完成したのは万治二年（一六五九）春、上皇は春秋の御幸をはじめ内々にも訪れた。延宝八年（一六八〇）八月一九日に後水尾院が崩御した後、享保六年（一七二一）以降、霊元法皇がしばしば御幸、文政七年（一八二四）、将軍徳川家斉の援助で離宮は大修理され、同年九月二一日に光格上皇が御幸した（平凡社刊『京都市の地名』による）。「野路のちりひち」は、翌一〇月四日皇太后欣子内親王が山荘を遊覧した様子を、同行した作者女房右衛門佐局（頭注3参照）が書き記したものと思われる。漢字は一部新字体としたところもあるが、仮名づかい、漢字・仮名の区別などは原本どおりに活字化した。

野路のちりひち

祭見んとて京にかへり登りし時広はし殿にまゐりしか左宰相[頭注1]との、見参に入てなにくれのこと申うけ給はりけるほとに修学院の離宮のものかたりになりてさいさものこのひと、ちをとう出てこれ見よとのたまひしを一わたり文はへりてさて作者はたれにてはへるにやとひ申[し]にこの婆其ぬしよいといたくはちらひて名をかくいたれはさたかにはしらねと大宮[頭注2]の女房のなかなりかとのたまひしなり侍所[頭注3]になか出てすなはちうつしおくとてこのよしをろ〳〵しるしおくになむ

文政八年四月十九日

菅原雪臣[1]

文政の七とせなか月の廿一日といふに修学院の御幸もいとにきは、しうすませ給ひしかはおのかとちもまうてはへるへきよし仰ことのありしをいとかしこまりて神無月のはしめの四日おもふとちみたりよたりかたらひあはせてつとめてまゐるへきよし宵よりちきりおく今宵はめもあはぬ心地して夜ふかくおき出てみれは空いとよくはれてうれし霜白うさむけなるをもいとひもやらてよそほひいとなみたつ

夜をふかみ起ゐる霜のさむさをもいとはていそくけふの山ふみ

辰過るころよりむれつ、出行河原[頭注4]のほと心ものひやかに見渡しはへるに木ふかき森の中にあけ[頭注5]の鳥居のかう〳〵しきは出てもうてまほしけれと我のみならねは心にもまかせす輿なからうちかしこまり申つ、糺[頭注6]といふこともかくしてよみつ、なんをこかまし

神垣はそことしりつ、よそにたゝすくるをいかにみそなはすらん

行〳〵道のところ〳〵賤か家のあやしけなるもあり又あら〳〵しきをのこともの多く物をおひ荷なひなとして来るは若狭の方より魚をもち出るならんといとめつらかに見る新田[頭注7]とかやいへるところに竹垣し門したるうちにしりたる御方のかり[頭注8]庵しつらひおき給へるをかねて其鎰預もたる人にいひおきたれはそこに入てしはしかほとうちやすむこの庵かりそめなれときたなけなくあたりいと静にて夏にもとまらまほしきこゝちはへれと行方にいそかれて出たつ

月のころ雪のあさけのなかめしもおもひやらるゝ庵のしつけさ

ほとなくすかくゐに参りつきぬありし御ゆきのさまなと思ひやり奉るもおほけなしやこゝを寿月観[頭注9]と申よしかりそめなる御しつらひ共なれといと清らかにめつらかなるおましなりかたはらを蔵六庵となんうけ給はる山よりしたゝる水の音紅葉もかけものほりたるかこき薄き色をましへかたへは常盤木も見ところあるさまなか〳〵えもいひかたし

かしこくも過しみゆきのあとつけてあふきつゝ見る山のもみち葉

入道准三宮[頭注10]前のひたりのおほひまうち[頭注11]きみなとはやくまゐりつとひ給ひたれは君たちも御物まゐりおのかとちもたよりなとしてさて隣雲軒にのほる四方のみはらし御地のさゝまなとけにこと葉にはなか〳〵になん所ゝ見廻りてふもとの木ふかきかたに大山つみのみことの御社あるをやゝ入りて猶しけりたる所に三社[頭注12]ましますあゆみかねたれと登りてぬかつき奉る萱葺にていとかう〳〵しうそあめる

まつことの御代なかゝれといのる哉この山かけの三の社に

隣雲軒の御はしのかの名[頭注13]におふ紅葉のひと木いとちいさけれ時をえてこと木よりは色深く見ゆ洗詩台とかやいふめる板敷もあり西南のかたひとめに見えちかく松か崎玉山の麓なともみおろさるゝえもいひかたきなかめなり

西山やよとの河なみ末かけてつゝく雲居のほとそはるけき

山陰より岩はしる瀧のひゝきあひていさきよき流れのもとを行かへりて

くり返しあかす染つれ岩根よりみなきり落る滝のしら糸
雲母[頭注14]へまうてんとてうちつれ山路を分行にいとほ[ママ]とちかし明王の御前にまゐり伏をかみ瀧の許に至るこゝにもいかめしき御かたちの明王まします例のいのりをそする
君か代のいやなかゝれと一すちにかけてそいのる瀧のしら糸
音羽御所[頭注15]へも昔覚えてたつね参る過し炎上の折からしはしの御座なりしことなと年歴にけるをおもひつらねて見る処〳〵其節にかはることなし
かそふれは三十とせあまりひとゝせをや[ママ]たて来にける秋霧の空
何となくこしかた恋しく古きこと、ものきかまほしき御調度めくからものなともはへれと心にもあらすいそかれて隣雲にかへりまゐる君達御くたものおほみきなとまゐるをかれこれともまかなひなともしつゝおのかとちもひわりこくたものなととりちらしくふほとに夕影にもなりはへりしかは早く東山にまうてんとむれつゝゆく神かきのほとりにすこしこたかきところに青へ[ママ]かにさかへたる松のめくりに玉垣しわたしたるこれ[そ]君の[頭注16]御胞衣をさめられたる所也四十あまりにもなりぬれはいと木高くけにも千代ふへき陰とあふきつゝ
ちよふへききみかためしもみかきなる松のさかえをなほ守りませ
なとゝ心のうちに祝し奉るもかしこしや日も入かたになれはいとなこりをしくて御地の辺りのすこしこたかきところなる窮遂軒に登りてあかぬ野山のなかめをしつゝ
うつし絵もなとかおよはむ野へ山へおのつからなる秋のなかめは
暮行まゝにいさ寿月観へと催さるゝもなほあかぬ見おろす山里の家居うちけふり夕月の光りほのめくなとこころあらん人にみせまほし

こゝかしこ夕けのけふりたちそひて霧にくれ行山本の里

寿月観に帰ぬまゐりぬ大となふらなにかといとそうかはしく君たちもおもの参りおのかとちもゆふけもよほすいとさわかしくした[る]をのことものたちこみらふかはしくうちしわふくなともほとちかけれはさ[こ]そ夜更ぬうちにといそきてまかり申すを院の女房たちのまたよとれたまはすもいとうれしく

わするなよ紅葉のにしきいくちたひきつゝなれみむ秋のちきりを

君達もまかて給ふけはひなれは道のいとらうかはしからんにはといそき催したてゝしそき出ぬかへさは月入ぬれはくらうてものゝあやめもわかすかくて戌過る頃かへり参りぬなほあかぬなかめをいひつゝくるも命のふるこゝちして君の御めくみの何かにつけてもかしこきをそ思ふはるかなる道のゆきも輿にたすけられ人あまたくしつゝものおもふことなかりしはかへす〳〵もおほけなくそおもひはへる

ほととほき道のあゆみのくるしさのうさをもしらてかへるかしこさ

文政八乙酉十二月八幡中務光保[2]所蔵の本を以うつしぬ　元貞[3]

〈頭注1〉　左宰相との　左大弁宰相光成卿[4]儀同三司伊光公孫従一位胤定々嫡

〈頭注2〉　大宮と通称し奉るは皇太后宮[5]と申へきを[皇后の]二字を略せしなり

〈頭注3〉　侍所の当番のなかのひとりかいへらくこの作者おそらくは大宮の女房右衛門佐局[6]なるへし此人大宮のまた入内もし[給]はて御祖母恭礼門院[7]の御所に御同居ましし時よりみやつかへする人なり八條の前宰相隆礼々の妹にて歌は芝山故前中納言持豊卿[8]の弟子なりといへり

〈頭注4〉　河原　加茂の河原なり

〈頭注5〉　あけの鳥居加茂下賀[茂社]なり

〈頭注6〉 糺神社下加茂之内也

〈頭注7〉 新田村[9]　光保公　しわしは　しわたし　なひへし

〈頭注8〉 かり庵油小路殿[10]別荘也

〈頭注9〉 寿月蔵六庵を下の御茶屋といふ

〈頭注10〉 入道准三宮鷹司前関白政熙公也[11]

〈頭注11〉 ひたりのおほいまうち君は二条前左大臣治孝公也[12]

〈頭注12〉 三社　霊元上皇御勧請住吉玉津島栃木三社なり

〈頭注13〉 かの名におふ紅葉後水尾院御愛樹隣雲軒の前にあり

〈頭注14〉 雲母きら、　ひえの山へか、る道きらら坂のそこに伝教大師の作の不動明王ましますゑより上へは女人の上ることゆるさす

〈頭注15〉 音羽御所林丘寺殿[13]也今は御無住也天明八年内裏炎上の時恭門院と同し皇太后宮しは□のほと此御所に松はらをしかり皇太后宮此時女一宮と申せし時□也三女房も其供奉してこ、に侍りし也

〈頭注16〉 君の御胞衣　君は皇太后宮をさし□申也

後桃園院皇皇女安永八年御隆誕寛政六年御入内同年立中宮

文化十四御譲位後奉称皇太后宮俗奉称大宮御所

御胞衣ヲ埋コト陰陽頭ヨリ吉方□勧進スルコト古例也此御所ハコノ赤山[14]ニ埋ラレシナリイツニテモ洛中洛外ノ社地ニ埋ラル、コト也

大宮御方今年御齢四十六窮邃軒池ノ中洲ニ在

注

(1) 菅原雪臣（垣本雪臣）歌人。通称貢、莊町と号する、伊勢の人。京都に出で仁和寺宮に仕えた。伴蒿蹊、橋本経亮、及び季鷹に学んだ。天保一〇年（一八三九）一一月三日没、年六三。雲錦翁家集に跋文がある。

(2) 八幡光保　国学者。通称中務。伊勢宇治の師職。文政四年本居春庭の門に入る。

(3) 長谷川元貞か　国学者。通称次郎兵衛。伊勢松坂の人。文政二年本居春庭の門に入る。

(4) 広橋光成　公卿。寛政九年（一七九七）一月二六日―文久二年（一八六二）閏八月九日。京都の人。本姓藤原日野家、日野支流。父権大納言広橋胤定、母権大納言葉室頼熙の女。世々文学をもって仕う。著書に「光成卿記」「和宮御入輿雑記」等がある。

(5) 光格天皇の皇后、欣子内親王。安永八年（一七七九）一月二四日―弘化三年（一八四六）六月二〇日。御年六八。後桃園天皇の皇女で、御母は盛化門院藤原維子。安永八年十月に父天皇が崩御し、母皇太后も文明三年十月に崩じたため、幼時はもっぱら祖母恭礼門院のもとで養育された。天保一二年閏正月二三日院号を蒙りて新清和院と称する。

(6) 女房右衛門佐（衛門佐・右衛門佐）藤原北家四条家流。中御門天皇の外祖父従一位内大臣櫛笥隆賀の二男権中納言隆英（一七〇二―五六）を祖とする。父二代目八條隆輔、母山城守大江広豊の女。「高貴宮御色直覚」「三御所有卦入心覚」「新清和院女房刺櫛弘覚」他、多数著書がある。

(7) 桃園天皇の女御藤原富子の院号。寛保三年（一七四三）二月四日―寛政七年（一七九五）一一月三〇日。御年五三。父前関白太政大臣従一位准三后一條兼香、母飛鳥井雅豊の女。後桃園天皇の御母である。

(8) 芝山持豊（藤原持豊）歌人。寛保二年（一七四二）―文化一二年（一八一五）二月二〇日。年七四。父権中納言言

重豊、母正三位兼仍の女。明和四年山県大弐事件に連座し、捕えられたが刑を免れた。歌学は二条派に属したが、率先して本居宣長の説に傾倒し、応酬の歌もある。堂上歌学覚醒の基を作った。著書に『美玉之記』『芝山大納言持豊卿詠』がある。持豊の歌論を門弟深田正韶が『歌道御答書』（芝山持豊卿開書）として記している。

(9) 新田村（しんでむら）　現在の敦賀市三島町。若狭街道が村内を通る。

(10) 油小路氏（あぶらのこうじ）　公卿、羽林家。藤原北家四條家流。西大路家隆の男隆蔭、邸を京師油小路に居せしにより家名とする。

(11) 鷹司政熙（たかつかさまさひろ）　公卿。宝暦一一年（一七六一）四月一〇日―天保一二年（一八四一）二月七日。年八一。本姓藤原北家。父後心空華院関白輔平、母長門侍従重就の女。文恭院入道と号する。

(12) 二条治孝（にじょうはるたか）　公卿。宝暦四年（一七五四）二月九日―文政九年（一八二六）一〇月六日。年七三。本姓藤原氏。父従一位右大臣宗基、母家女房。

(13) 修学院離宮中の茶屋の東に接する、聖明山と号する臨済宗天竜寺派の尼門跡寺。寺の前身は後水尾天皇の第八皇女朱宮光子内親王の朱宮御所（音羽御所）である。

(14) 赤山禅院（せきさんぜんいん）　修学院離宮の北にあり、比叡山延暦寺の別院。この地は京の東北表鬼門にあたり、方除けの神として信仰も厚く、陰陽道の泰山府君祭の流行に伴い、疫病・災除けの神としても崇敬された。近世には商売擁護の神として一般の信仰をも集め、懸寄神とも称せられる。

〔付記〕ご助言、ご教示をいただいた柿谷雄三先生、池田勇先生に厚く御礼申しあげる。